

ニュージーランドでは5年ごとに国勢調査が行われており、直近では2023年3月に実施されたところであるが、不詳の増加や財政上の理由により、次回の国勢調査は従来のやり方から大きく変更し、複数の行政情報を組み合わせて国勢調査として毎年公表するが、行政情報では得られない情報についてはサンプルサーベイを実施して補完する、という方法を検討している。この国勢調査の方針についての大きな変更は現在、ニュージーランドの人口学研究者にとって大きな関心事であり、今回の大会においても国勢調査や行政情報をテーマとして3つのセッションが企画され、活発な議論が行われており、大変興味深かった。

また、イリーナ・グロスマン博士 (RMIT) による「小地域における将来人口推計」と題したキーノートスピーチは、AIや機械学習は人口推計のどのプロセスで活用されるのかを検討したもので、過去の趨勢を延長する従来の手法は依然として精度が高い一方で、販売予測などの分野では機械学習と従来型モデルのハイブリッドアプローチが最も精度が高かったことなどの事例が紹介されており、非常に参考になった。

今回の大会参加ときっかけとなったのは、昨年2024年11月にワイカト大学人口研究所の研究チームが当研究所に来訪したことであり、本大会で彼らと再会して意見交換できたことも大きな収穫となった。
(藤井多希子 記)

ASMB-JSMB2025 企画シンポジウム

2025年7月11日、京都大学主催のASMB-JSMB2025(於・京都テルサ)の企画シンポジウムにおいて、「Eigenvalue Problem of the Multi-State Age-Structured Population Model and the Population Structure of Japan」という題目で講演を行った。本発表では、多状態年齢構造人口モデルの固有値問題に焦点をあて、日本の人口動態の解析に適用した研究成果を報告した。特に、人口置換水準と固有構造の関係を理論的に導出し、出生率・死亡率・移動の各要素が定常人口に及ぼす影響を新たな人口学的指標として定式化した点を強調した。聴衆には数理生物学、応用数学学双方の研究者が含まれ、人口減少や少子高齢化に関する具体的な議論が展開された。今後の国際共同研究に繋がる貴重な交流の場となり、理論研究の社会的意義を再確認する機会となった。(大泉 嶺 記)

第30回国際人口学会大会(オーストラリア・ブリスベン)

国際人口学会(International Union for the Scientific Study of Population: IUSSP)の第30回大会(30th International Population Conference, IPC2025)が、2025年7月13日から18日にかけてオーストラリア・クィーンズランド州ブリスベンのブリスベン・コンベンション&エキシビション・センターで開催された。IUSSPは、人口問題に関する科学的研究の発展と学術交流の促進を目的として1928年に設立された国際的な学術団体であり、同年パリで開催された第1回会議以降、第二次世界大戦期中断を挟んで継続的に学術大会を開催してきた。1965年以降は4年ごとに定期的に開催されているが、2021年12月にインド・ハイデラバードで開催予定であった前回大会はCOVID-19パンデミックの影響によりオンライン開催に変更されたため、対面での開催は2017年の南アフリカ・ケープタウン大会以来8年ぶりとなった。

開会式では、国連人口賞(United Nations Population Award)の2025年機関部門にIUSSPが選ばれ、本大会に先立って授与式が行われたことが報告された。開会式を除く5日間で、209のセッション

ン（4つのプレナリー・セッションおよび4つのポスターセッションを含む）が設けられ、合計で約1,100件の口頭発表と870件のポスター発表が行われた。また大会組織委員会の主催によるものだけでも、14のサイドイベントやワークショップが並行して開催された。

本研究所からは、林玲子（所長）、岩澤美帆（人口動向研究部長）、菅桂太（人口構造研究部室長）、福田節也（企画部室長）、中川雅貴（国際関係部室長）が参加し、それぞれ研究発表や討論を行った。林所長は、国連人口部が企画した「国連人口推計の方法論的発展と利活用」に関する特別セッションにも登壇した。また、本研究所の参加者は、オーストラリア政府内に2019年に設立された人口分析および政策的活用のための専門機関（Centre for Population）のスタッフと交流を深める機会を設けるなど、大会期間を通じて各国の参加者との活発な意見交換や最新の研究動向に関する情報収集に努めた。

大会の詳細は以下のウェブサイトでご覧可能となっている。<https://ipc2025.iussp.org/>

なお、本大会の閉会式では、次回の第31回大会が2029年7月にスペインのバルセロナで開催されることが発表された。（中川雅貴 記）

統計数理研究所 招待講演

2025年7月29日、統計数理研究所で開催された「諸科学における統計思考」において、「積分投影人口モデルの固有構造」という題目で招待講演を行った。本講演では、積分投影モデル（IPM）の固有構造に関する近年の研究成果を紹介し、とくにFredholm理論に基づく数理的解析が、人口学における安定年齢分布や繁殖値といった概念をどのように拡張できるかを解説した。また、日本の人口動態に即した数値例を示し、数理的な理論枠組みと現実の人口問題を結び付ける重要性を強調した。質疑応答では、参加した統計学研究者や若手の学生から、数理モデルの実証的応用やデータ解析手法の発展に関する多くの質問が寄せられた。本講演を通じ、統計的視点と数理人口学との架橋が今後の学際的研究を推進する鍵となることを示すことができた。（大泉 嶺 記）

APEC 2025 韓国 「人口対応と AI 協力に関する官民対話」

APEC（アジア太平洋経済協力）は、アジア太平洋地域の21の国と地域が参加する経済協力の枠組みで、1989年より閣僚会議が、1993年からは首脳会議が開催されており、今年2025年は韓国が担当国として各種会合を開催中である。今年のテーマは、人口変動とAIであり、10月の首脳会議、8月の第三回ハイレベル会合に合わせ、「人口対応とAI協力に関する官民対話（Public-Private Dialogue: Demographic Response & AI Cooperation）」が2025年8月11日（月）、12日（火）に韓国・仁川の松島コンベンシアにて開催された。

筆者は人口対応に関するセッションのパネリストとして参加し、チョ・ヨンテ ソウル国立大学教授を座長に、スリポン・ブンブン タイ・マヒドン大学人口研究所元所長、トラン・フン・ファイ ベトナム・アジア商業銀行頭取、医療経済が専門のキム・ヒュンチョル韓国延世大学教授と、アジア太平洋の少子高齢化の見通しについて議論した。人口変動とAIは、それぞれ別々のプログラムであったが、人口変動にも若い世代はITやAIなしでは生きていない状況を考える必要性や、人工子宮まで可能性が開けてきたといった生殖補助医療の言及もあり、経済を起点に幅広い視点が登場したことは興味深かった。（林 玲子 記）